国府台女子学院小学部　　2025.12.5

仏教通信「イエスと親鸞」12月号

本校は仏教系の学校ですが、小・中・高の「仏教」の授業では、単に仏教や浄土真宗に留まらず、多様な文化や世界の宗教・思想を学ぶことを重視しています。特にキリスト教・イスラム教・ユダヤ教の根幹をなす「旧約聖書」や、世界最大の信者数を擁するキリスト教の聖典『新約聖書』をはじめ、幅広いテーマを取り上げ、児童・生徒の視野を広げる授業を展開しています。今学期、小学部6年の「仏教」の授業では、イエス・キリストの教えと生涯について学習を深めました。キリスト教系幼稚園出身の児童も少なくなく、イエスの人物像に親しみを覚える声も聞かれました。

この学習の中で、児童たちに紹介するイエス・キリストの姿は、小説家でありクリスチャンでもあった遠藤周作氏の提示する「人間イエス・キリスト」像がお手本です。遠藤氏の著作において、イエスは世俗的な威厳や権威を示す強者としてではなく、むしろ弱さや悩みを抱えた人間として描かれます。しかし、その弱々しいはずのイエスが、弱く、醜く、卑怯な心を持つ人間さえも徹底して受け入れ、常に寄り添い続けるという弱々しくも強い心を持った人間として捉えていたのが、遠藤氏のイエス観でした。その遠藤氏の代表作であり、マーティン・スコセッシ監督によって映画化もされた『沈黙』には、このイエス観が色濃く反映されていました。作中、信仰を裏切ってしまう「弱く」「卑怯」な心を持つ信者キチジローや、信仰を捨てたポルトガル人神父のロドリゴといった、罪や弱さに苛まれる「弱者」たちに対し、イエスの姿と声は絶えず彼らに愛と赦しを送り続けます。この作品を通じて、遠藤氏は「弱い人間にこそ、イエスは共に歩んでくれる」という、信仰が揺らぎ続ける人間の弱さを受け入れる独自のキリスト教理解を示していました。

一方、浄土真宗開祖の親鸞聖人の教えの中心にあるのは、煩悩に苛まれ、自らの力（自力）で完全な善や悟りを達成することが難しい人間の限界を見つめ、阿弥陀如来の絶対的な救い（他力）に帰依する「他力本願」の精神です。親鸞聖人は、時代や地域を超えて普遍的な倫理観であるはずの「不殺生」の教えや律法が存在するにもかかわらず、私たち人間は私利私欲や憎しみに駆られて「殺人」や「戦争」を引き起こし、「正義」「国家」の名の下に他者の命が奪っていく現実を深く洞察されました。そして、『歎異抄』（唯円 著）の「さるべき業縁のもよほせば、いかなるふるまひもすべし」という言葉を通じて、私たちは置かれた状況や関係性によって、どんな悪行でも犯し得る「悪」の可能性を内包していることを示唆されました。聖人は、この自らの内なる「悪」の可能性を深く自覚し、謙虚に向き合うこと、すなわち「悪人の自覚」こそが重要であると説きます。この自覚こそが、自分が絶対的な「正義」であると過信し、他者を断罪する独善から抜け出すための鍵となります。自らの弱さや悪性を認められるからこそ、他者をも「共に弱さを抱える人間」として認め、許すことが可能となり、真の意味で「共に生きる」道へとつながります。

私は、遠藤周作氏の描く弱き者に寄り添うイエスの愛の姿は、親鸞聖人の説く他力本願の精神と深く響き合うように思っています。自力による救済を断念し、自身の弱さや悪性（悪人）を自覚した者こそが、阿弥陀仏の無限の慈悲（他力）によって救われるという親鸞聖人の思想。そして、限りなく弱き者に愛を注ぐイエスの姿。この二人の教えは、完璧な人間は存在せず、常に弱さと罪の可能性を抱えているという人間のあり方を前提としています。真の「救い」とは、個人の「強さ」や「道徳的な努力」の達成ではなく、自身の「弱さの自覚」を通じて開かれる「悪人の自覚」こそにあると思います。自らの弱さと悪を謙虚に認めるからこそ、私たちは他者を断罪する独善から離れられ、共に弱さを抱える人間として認め、許すことができると考えます。この「弱さの自覚」に根差した共生の精神こそが、憎しみや対立を超え、国家や民族、宗教・思想の違いを超えた平和な未来を築く第一歩になるのではないでしょうか。　合掌

2学期の終業式は12月20日(土)に行われます。小学部礼拝委員会